

鑑賞の手引き

竹久夢二《千代紙 大椿》 大正～昭和初期 京都国立近代美術館（川西英コレクション）蔵

■竹久夢二について

竹久夢二（1884～1934）は、「大正浪漫（ロマン）」を代表する画家です。日本画をはじめ、油彩画、木版画、デザインの分野で才能を発揮しました。特に「夢二式美人」と呼ばれる叙情的な美人画はよく知られています。また、詩や童謡など文学の分野でも才能を発揮し、夢二作詞による「宵待草」は大流行しました。

■千代紙について

千代紙は、木版を使って和紙に一枚ずつ摺られた日本の伝統的な装飾紙です。木版多色刷りの技術が完成した江戸中期から広まり、贈り物のラッピングや折り紙や紙細工に使われてきました。木版画の柔らかい風合いを愛した竹久夢二は、近代的なデザイン感覚の新しい千代を「みなと屋」から発売し、若い女性たちの間でたいへん評判になりました。椿の花は、夢二が好んだモチーフで、美人画のなかの女性の着物や半襟のデザイン、本の装幀などにも繰り返し使っています。

鑑賞のポイント

◆写真と比べてみよう。

花が咲いた椿の二枝をリズムカルに図案化した千代紙です。実際の椿の写真と比べて、図案化するためにどのような工夫がされているかを考えてみます。

花と葉が重ならないように平面的に配置されています。花は、花びらを省略して赤い円で描かれています。それぞれが少しいびつな形をしていて、中心に雄しべを表す小さな楕円形を置くことで椿だとわかります。また、丸くてつるつるした椿の葉の特徴がシンプルなアーモンド形でとらえられ、白い葉の主脈の線が、画面にリズムをつけています。枝は、薄い色でところどころ途切れるように描かれおり、空に漂うように軽やかです。

白地に花の赤と葉の青がとてもくっきりとして鮮やかです。作者がどうして葉を緑でなく青にしたのかも、問いかけてみてはどうでしょうか。

◆あなたなら、この紙を何に使う？

千代紙を身近に感じられるよう、自由に考えてもらいます。プレゼントの包装紙、カードにする、ブックカバー、折り紙で小物入れを作るなど、どんなユニークな意見がでるでしょうか。